

よろずは

平成二八年

三月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

桃花^{つばき}褐^{せめ}の

浅^{あさ}らの衣^{ころも}

浅^{あさ}らかに

思^{おも}ひて妹^{いも}に

逢^あはむものかも

万葉集 卷十二―二九七〇

作者未詳^{さくしやみしやう}

【意訳】

淡紅色に浅く染めた衣のように、
心浅く思つて妻に逢うことがどうしてあるだろう。
(心に深く思つて逢うのだ)

桃色^{ももいろ}・とき色^{いろ}・ピンク色

「桃色」ということばで、皆さんはどんな色を思い浮かべますか？ 現代日本では「ピンク」を思い浮かべる方も多いのではないかと思います。これらは単に日本語と英語との違いだけではなく、そもそも指し示す色が違うのだそうです。

色の見え方は光や物体によって変化しますし、呼び方も文化によって異なりますので、現代では色相^{しきそう}・明度^{めいど}（明るさ）・彩度^{さいど}（鮮やかさ）と呼ばれる色の三属性で客観的にあらわします。ピンクは赤と白を混ぜて出来る色の総称と言ってよく、濃淡によりさまざまなバリエーションが存在しますが、明度が高く彩度の低い赤と言えます。桃色はそれよりも明度の低い赤、とき色は紫がかかった赤をいうそうです。

この歌にある「桃花褐^{つばきせめ}」とは、桃の花を使った淡い赤色の染め物を言い、鳥のトキ（古名ツキ）の色になぞらえた名前であったといえます。「浅い心」のたとえに用いていますから、当時はとても淡い色を指していたとみられます。

【万葉古代学係】